

日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2008年9月10日採択

申請者氏名	中村有希 (会員番号 4749)
連絡先住所	〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3 ニュートリノ科学研究センター
所属機関	東北大学
職あるいは学年	D2
任期 (再任昇格条件)	
渡航目的	研究集会での口頭発表
講演・観測・研究題目	The overview of our search for Lyman-alpha emitters and absorbers at $z = 3.1$
渡航先 (期間)	ドイツ (2008年10月5日 ~ 10月11日)

私はドイツのハイデルベルクで開催された研究集会”Understanding Lyman-alpha emitters”に参加しました。本研究会では5日間を通して、ライマンアルファ輝線銀河についての最新の研究紹介と、ライマンアルファ輝線銀河の検出や解析手法に関わる詳細な議論、そして今後の展望を考える議論などが展開されました。

私は本研究会において、”The overview of our search for Lyman-alpha emitters and absorbers at $z = 3.1$ ”というタイトルで口頭発表を行いました。発表内容は、主に $z = 3.1$ のSSA22領域における我々のライマンアルファ銀河観測の結果を概括したもので、ライマンアルファ銀河の緒性質、例えば空間分布、数密度、光度関数、二体相関関数について紹介しました。我々の観測領域であるSSA22領域全体のライマンアルファ輝線銀河数密度は、対照領域として観測したSXDS(The Subaru/XMM-Newton Deep Survey), SDF(The Subaru Deep Field Project), GOODS-N(The Great Observations Origins Deep Survey-North)の全体比べて、約1.5倍もあり、非常に大規模な星形成銀河高密度領域であることが分かってきました。このような銀河形成の現場を直接観測する研究を広く伝えることができたことは大変有意義なことだったと思います。

今回の発表は外国における初めての英語発表ということで大変緊張しましたが、発表前日の真夜中に発表練習に付き合ってくれた指導教官と先輩をはじめとして、応援しながら熱心に聞いて下さった会場の皆様のおかげで何とか伝えなかった内容を伝えることができました。この発表の経験を活かして次の発表ではより落ち着いた状態で、相手に自分の研究をアピールし、伝えることができると思います。

しかし反省点として、英語が苦手なために他の発表者の方々の内容が今一步理解できなかったこと、そして折角発表後に個人的に質問をしてくださった方々にも思ったように自分の答えを説明できなかったことがあります。また専門分野に知識が足りない部分がまだ多くあることも議論を理解し難い要因の一つであることが良く分かったので、今後は英語を勉強しつつ、自分の専門分野の勉強を更に深めて活発に研究者の方々と議論を交わしてみたいと強く思いました。

今回の研究会では直接の専門分野であるライマンアルファ輝線銀河研究について、現在の流れ、他の研究者の方々が今何に注目しているのか、といった研究の方向性を学ぶことができ執筆中の論文に有益な情報を沢山得ることができました。論文では研究会で聴いた講演内容、そして講演者の方々が執筆された論文をまとめてバックグラウンドとして紹介しています。

最後になりましたが、今回の海外渡航を援助して下さった日本天文学会、そして早川基金関係者の皆様には心よりお礼申し上げます。この渡航は天文学を学ぶ機会と言うだけでなく、自分の研究生活にとって重要な活力が得られた大変貴重な経験となりました。今後この経験を活かして研究を進めていきたいと思えます。